

東日本大震災・子ども応援プロジェクト 小豆島サマーキャンプ
～小豆島に笑顔が咲きました～

発表者：代表 木下 真
松尾 忠正 新田 司
三浦 誠 野老 憲一
小林 亜希子

●サマーキャンプの概要・趣旨

主催：東日本大震災・子ども応援プロジェクト	実施日	：平成23年8月18日（木）～22（月）
共催：瀬戸内国際こども映画祭2011	参加者	：仙台市荒浜小学校 5,6年生 20名 仙台市東六郷小学校 5,6年生 14名
後援：日本子ども学会、香川県、小豆島町	引率者	教諭ほか 8名
協力：仙台市教育委員会、千葉敬愛短期大学	合計	42名

○被災地でストレスの多い避難生活をしてきたであろう子どもたち。その子どもたちにのびのびと過ごせる数日間を提供したいというのが、サマーキャンプの主な目的でした。また、新しい仲間と知り合ったり、旅先でさまざまな発見をすることで、未来には楽しい出会いが一杯あるんだという前向きな気持ちになってほしいという願望もありました。さらに、保護者に対しては、「社会はあなたたちの子育てを応援していますよ。心配しないでください」というメッセージを感じ取ってもらうことを意図していました。

●子どもたちの被災の状況

サマーキャンプに参加した子どもたちの通う小学校は、仙台市若林区にある。同区は、仙台市東側に位置し、地震とあわせて、津波の被害を大きくうけた。海岸沿い周辺の民家、商店等はほぼ全てが津波により流された。現在は、住民の方々は仮設住宅やアパート等に転居しており、復旧関係者などが出入りするのみとなっている。

荒浜小学校は海岸から1km圏内に位置するところにある。写真からもわかるように体育館の屋根の高さまで津波が押し寄せた。校庭は現在、瓦礫置き場となっている。

東六郷小は海岸から2km圏内に位置するところにある。子どもたちは、周辺から非難してきた住民とともに、教室の2階で一夜過ごした後救助された。



9月現在の東六郷小学校。



9月現在の荒浜小学校。



子どもたちが一夜を過ごした理科室。



荒浜小近くの交差点にあるガソリンスタンド。



●子どもたちの様子

～5日間の生活を通して私たちが感じた様子や、印象に残った場面です。～

- ・私たちだけではなく、他の子どもたちに対しても、ボディタッチが多く、何を話すわけでもないけど、そばに来て、腕をそっとつかんだ子。寂しさや、不安な気持ちからなのかなと思いました。
- ・ホテルの窓から見える海を見て、「ここに津波がきたらどうする」などロクに明るい様子で話す子どもが多くみられました。
- ・みんなで歩いているときに、ちょっと立ち止まってみたり、うずくまったりする子もいました。ふとした時、何かを思い出すのでしょうか。
- ・帰りのバスの時間。海沿いの道を走っていると、突然震災当時の話を始めて、近くにいた子も、今まではその話題は一度も触れなかったのに、何かせきを切ったように当時の家の近所の様子や、親戚の亡くなった人の話などを一気に話していました。

●子どもたちへのアンケート

東六郷小学校<14名> 荒浜小学校<20名>

Q1 キャンプについて思ったこと、考えていたことについて教えてください。

仲良くできるか心配だった

楽しみ

どういう島なのだろう

海に行くことに対して、大人は心配していましたが、子どもたちはそれほど心配していませんでした。

Q2 小豆島に行く前と行ったあとでは、何か変わったことはありますか？

人見知りしなくなった

思いやりが持てるようになった

行く前は、四国のほうで、何かおきてもなんとも思わなかったけど、行った後は、気になるようになりました。 アンケートより

楽しくて笑うことが多くなった

小豆島の人たちや大学生にはげましてもらって勉強に集中できるようになりました。

心がスッキリしたような感じがした。

アンケートより

Q3 小豆島で過ごした5日間で、何が一番印象に残っていますか？

キャンプファイヤー

みんなでワイワイ遊んだ

みんなでお風呂

かかし作り

子どもたちのアンケートから、特別なイベントよりも、日常にあふれるような友達との出会いや、一緒に遊んだことなどが思い出となっていることが伝わってきました。

バーベキュー

公民館で荒浜小と東六が夢宣言をしました。ぼくは、「いろいろな料理を作って三ツ星シェフになる。」といったので絶対あります。 子どもの新聞より

ナイトハイク

Q4 もう1度キャンプにいけるとしたら、どんな場所で、どんな事をしたいですか？

みんなと一緒にディズニーランド

海に行きたい

釣りがしたい

温泉巡り

また同じ場所で、小豆島の人、あっこ、まこと、けんちゃんと、まっちゃんと、木下さんと、東六郷のひとと荒浜のみんなで行きたい

地曳網

次回行きたいところが『海』という回答が多く、私たちは驚きました。津波の海は津波の海、楽しい海は楽しい海と、子どもたちは全く別のものとしてとらえているのかもしれない。

●仙台市教育局

学校教育部 教育相談課

主幹兼教育相談班 主任指導主事 菅原 賢二様より

私の立場上、どのキャンプの企画を見る際にも、スケジュールが過密になっていないかどうかを注意して見ています。あまり過密すぎるようだと、こちらから提案させていただくこともありました。今回のサマーキャンプにつきましては、被災した関係で他県に引越し等をされた児童まで連絡が届かず、行きたかったのに…という話を受けました。どこまで連絡をすればいいのかなどを含め、キャンプを受け入れる体制を整えることが難しいところです。

今回は車椅子の児童が行くということだったので心配はしましたが、いい思い出ができたという言葉聞くことができよかったです。他の児童たちも非常に喜んでいて、ひとえに感謝していますが、一度きりの企画で終わらせてしまうのではなく、継続的な支援をお願いしたいと思います。

●引率者の感想および今後の課題

<小豆島サマーキャンプに参加して>

本キャンプは、参加者全員が、傷病に見舞われることなく、大満足の感想を残して終結した。児童らが充実した時間を過ごすには安全・健康が必須の条件である。責任を担った一人として大いに安堵したところである。反省点としては、過密なスケジュールで、児童らの疲労が心配された点等である。遠距離間でメールのやり取りでの調整には、どうしても生じる問題であると反省している。

どの活動も客人に充実感を味わってもらおうとする心尽くしが溢れており、児童らはそれぞれ大いに満喫していた。活動の企画・運営を担当していただいた小豆島町職員各位の情熱的活動に改めて深謝する次第である。

推進委員 千葉敬愛短期大学講師 松尾 忠正

活動場所の下見ができなかったのが安全面で不安がありました。もう少し宿舎でゆっくりと過ごす時間があるとよかったですと思います。引率者としての役割も明確にしてほしかったと思います。もともと明るい児童が多かったが夏休み明けはさらに明るくなったと思います。

荒浜小学校 松田 啓弘

引率する立場として、子どもたちが海へのキャンプ地であることに抵抗を感じるのではないかという気持ちがありました。しかし、田園の中で育った子どもたちにはよい刺激で、素晴らしい体験ができる機会でもあると思えました。キャンプ後の子どもたちの様子として、会話の中に、小豆島の楽しかった思い出話が出てくるようになりました。以前は、津波の話が毎日のように出ていましたが、最近は少なくなってきたように感じます。改善点としては、ゆとりをもって過ごすことのできる自由時間があるとよいなと感じました。

子どもたちにとって忘れることのできない最高の思い出になったと思います。本当に感謝・感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

東六郷小学校 遠藤 正浩

私たちが考える以上に子どもたちは元気で、復興に対する熱い想いをそれぞれの胸の奥に抱えていました。子どもがポロっともらった「本当は辛いけど、みんなといると元気になるんだ。」子どもたちの気持ちが詰まった一言だと思います。この取り組みが「終わり」ではなく「始まり」として決意して、今後も子どもたちの笑顔づくりに協力していこうと思います。 千葉敬愛短期大学 野老 憲一

今回の企画は、被災された子どもたちへの支援の在り方について、深く考えるきっかけとなりました。心に深い傷を負いながらも、日々たくましく生きる子ども達の姿には、ただただ圧倒されるばかりでした。今後も子どもたちが笑顔でいれるよう、継続的な支援・協力をしていくことが私達の使命であると強く感じます。

千葉敬愛短期大学 三浦 誠

普段は明るい笑顔を見せる子どもたち。でもふとした時に見せる表情や言葉に、この子たちが地震や津波で負った心の傷が垣間見えました。「みんな頑張っているから自分も頑張らなきゃ。」と、そんな言葉をつぶやいている子もいました。そんな思いで子どもたちは、自分自身を支えているようにも感じました。今回の企画を通して、子どもたちが思いっきり遊べて、大人にちょっぴり甘えられる環境を提供していくことの大切さを感じました。上の二人の意見にもありますが、自分にできる、最大限のことを被災した子供たちのために継続していきたいと思っています。

千葉敬愛短期大学 小林 亜希子